Title	ラインホールド・ニーバーと宗教多元性 ： 現代におけるキリスト教の絶対性の神学的理解（ラインホールド・ニーバー研究 ： 共同研究報告）
Author(s)	鈴木, 幸
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-3 : 13-14
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2661
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

【ラインホールド・ニーバー研究】
ラインホールド・ニーバーと宗教多元性
―現代におけるキリスト教の絶対性の神学的理解―

2010年７月10日㈯、聖学院本部新館２階において、2010年度第２回ラインホールド・ニーバー研究会が開催され、27名の参加者があった。青山学院大学大学院教授の西谷幸介氏をお招きして、標

記のテーマの下、ニーバーがアメリカの宗教多元性に対して神学的にどのような思想と姿勢を持っていたか、発表をいただいた。以下に概要を記す。

1969年、ニクソン・37代アメリカ大統領就任後のインタビューに答えたニーバーの姿勢からも、ニーバーは宗教多元性に対して批判的であったように捉えることができるが、現代における神学的・キリスト教の絶対性という観点と合わせてニーバーの態度を考察する必要性がある。

1987年のニーバー理解のための会議では、ニーバーの宗教多元性をめぐる姿勢に対して、P. ラムジーとJ. カッディの議論が対立した。ラムジーが、ニーバーは宗教多元性に気を遣わなかったと言えば、カッディは、ニーバーこそ全面的に気遣いを見せた神学者であったと反論。２人を受けてニューハウスは、解決を見出すことのできない難問であることを説き、またR. フォックスは、ニーバーの曖昧性を述べた。

カッディによると、“civilized”されたニーバーは「文化的市民性の宗教」に捕らえられていき、そのために唯一神であるキリスト教の「非寛容さ」は犠牲になったと批判する。しかし、ニーバーがローゼンツヴァイクを受けて、ユダヤ教とキリスト教の密接な関係を考慮した上で両者を区別し、「ユダヤ教徒へのキリスト教伝道の放棄」したことは真意であり、宗教多元性への肯定的な態度を示したことになる。

社会もまた多元的である。特に教育の非宗教化はひとつの損失であると考えると、「寛容の精神に満ちた正義」に到達するためにも、すべての人が譲歩するという態度を示さなければならない。ニーバーは自覚的に、そして教育的に、「謙虚」の徳としての宗教的寛容に対する議論を展開したと考えられる。

西谷幸介 青山学院大学大学院教授（正面左）を迎え、27名が集まった

発表後の質疑応答では、今後の日本のキリスト教との関連、絶対性、カッディのヘノセイズムに対するニーバーの理解、ユダヤ人問題、宗教と政治の関係、寛容、バルトとの比較、人間学等、多岐にわたる議論が展開し、また、完璧な完成はないけれども、より良くすることが求められることが確認された。

（文責：鈴木幸　聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

（2010年７月10日、聖学院本部新館２階）